

ジョージ・ハーバートの詩と『田舎司祭の務め』

朝 倉 秀 之

I

ジョージ・ハーバート (1593-1633) は英国各教会が生んだ最初のもっとも敬虔な宗教詩人と言われている。ジョン・ダン (1572-1630) との対比において、特に強調される評価であることを考えると興味深い。ハーバートの特徴は詩作することと宗教的行為とが一致しており、詩人の義務は神の創造した世界を再形成して、神への捧げ物として提出することにあると、ハーバート自身が考えていたようである。臨終の床で、エドワード・ダンカンに一冊の筆稿を託し、友人のニコラ・ファラーに届けて、これは自分と神との間の心の葛藤の記録であるが、もし世に益するところがあると思えば出版してくれるように、と伝言を依頼した。このようにして世に出たのが *The Temple* (『神殿』) である。数年を経ずして二万部を売りつくしたとウォルトンは伝えている。

しかし、当時の慣習に洩れずハーバートもダンがしていたように親しい友人などには生原稿のまま回覧させていたらしい。詩が出版される以前に詩人として名声を得ていたことが、ハッチンソンの序文によっても知ることができる¹。その他にラテン語の詩と二つのラテン語演説原稿(ハーバートは26才から34才までケンブリッジ大学の public orator であった)が生前に印刷されている。

『神殿』の三部構造(『教会の玄関』、『教会』、『戦う教会』)については様々の研究がなされてきた²。結論的に言えば、いままで特に疑問もなく、というよりむしろ積極的に『神殿』は三部構造を持つものであるとする説が一般的であったが、リー・ジョンソンは『神殿』と名付けられた作品のうちの最後の『戦う教会』は全く別のものと考えるべきであるとの説を打ち出したのである³。

1. F. E. Hutchinson, ed., *The Works of George Herbert*, xl. (London, 1953)

2. G. H. Palmer, ed., *The English Works of George Herbert* (New York, 1905)

Annabel M. Endicott, "The structure of George Herbert's *Temple*: A Reconsideration," *UTQ*, X X XIV(1965)

Joseph Summers, *George Herbert: His Religion and Art* (London, 1954)

Louis L. Martz, *The Poetry of Meditation* (New Haven, 1954)

John David Walker, "The Architectonics of George Herbert's *The Temple*," *ELH*, X X XIX(1962)

Stanley Stewart, "Time and *The Temple*," *SEL*, VI (1966)

Sara W. Hanley, "Temples in *The Temple*: George Herbert's Study of The Church" *SEL*, VIII (1968)

3. Lee A. Johnson, "The Relationship of *The Church Militant* to *The Temple*", *SP*, Vd. 69, pp 200-206, 1971

そこでこの小論においてはジョンソンの説を踏えて、『神殿』の中の『教会の玄関』と『戦う教会』には含まれた形の『教会』の詩に限ってその特質をハーバートが書いた『田舎司祭の務め』⁴との関連で考察していきたい。

ハーバートは聖職者として信者からは聖者のごとく親われた人物であったと言われた。その姿勢は『田舎司祭の務め』の中によく表われている。第1章にキリスト教の中心的な教えを簡潔に述べた箇所がある。「聖職者はキリストの代理者であり、人間を神への従順へと導くことにあ
る。」としキリストが「和解の業」(the work of Reconciliation)を成就して天に昇られたあと、
聖職者はその業を代理することにあると述べている⁵。この「和解の業」とジョージ・ハーバートの詩の構造を見ていきたい。

II

「和解」という概念は、キリスト教の歴史の中では、「罪」と「罪からの解放である贖罪」と深く結びついている。聖書においては「和解」が人間の営みとしてではなく、神の恩恵として与えられると記してある。キリストの十字架の死による贖いによって成就されると見るところにキリスト教で言う「和解」の特徴がある。このように“reconciliation”は‘redemption’という言葉とも関係する。ハーバート自身がパウロの手紙であるコロサイ書を引用して述べている。

And therefore St. Paul in the beginning of his Epistles, professeth this: and in the first to the Colossians plainly avoucheth, that he *fills up that which is behinde of the afflictions of Christ in his flesh, for his Bodie's sake, which is the Church.* (「我(パウロ)今汝らのために受くる^{くるしみ}苦難を喜び、またキリストの体なる教会のために我が身をもってキリストの患難の欠けたるを補う」関根・木下編)

この聖書の中に聖職者の定義が簡潔に示めされており、キリストが行ったような「尊厳さ」と「義務」が聖職者にとっての務めに必要であることを説いている。このハーバートの『田舎司祭の務め』の言葉そのものが、詩作をするときの態度にもつながっていたのであろう。「和解」ということをハーバートは第一番目に取り上げており、これは確かにキリスト教の中心的な概念ではあったが、歴史的に見ると様々の解釈がなされていたことが分る。ハーバートが引用している個所のパウロの見解は重要な意味を持っていたのである。贖罪論には様々な解釈があった。イレナエウス(130年頃—220年頃)は要約説をとり、キリストの受肉の目的は人間を罪と死と悪魔から救い出すことであり、神はキリストにおいてこれを成就したとする説でオリゲネス(185年頃—254年頃)、アタナシオス(920年頃—1003年頃)などの東方教父、アウグスティヌス、グレゴリオ一世などの西方教父に継承された。

4. *A Priest to the Temple or, the Country Character, and Rule of Holy Life.*

5. F. E. Hutchinson, ed., *The Works of George Herbert*, p 225 (London, 1954)

その他、アンセルムス(1033/4年—1109年)の充足説⁶やアベラルドウス(1072年頃—1142年)の道徳感化説⁷などもあるが、トマスアクィナスの説はキリスト教の中で大きな流れとなっていた。彼の説はローマ・カトリック教会の教えともなった。本来人間は滅ぶべき存在であり、神はキリストの受難なしでも人間を救うことができたが、受難な人間の救のために最も適当な方法であって、キリストの受難における功績と満足と犠牲と贖いによって、人間は救われたと主張した。そしてプロテスタントの中のルターやカルヴァンの説は刑罰(代償)説⁸と呼ばれアクィナスの説と体系としては似ている。しかし、異っている点はパウロ的贖罪の論に重点を置くところにあった。

ハーバートがこのような贖罪論の様々な解釈に通じていたことは当然であったろうが、彼がそれを『田舎司祭の務め』などの中で書き記したり、詩として残すときには非常に単純で、簡素な形としている。当時の論争神学の時代とも呼び得る時代にあつて自分の立場を明確にする必要があつたであろうが、ハーバート自身はダンとは違ってあまり論争を好まない人物であつたようである。『教会の玄関』の中に次のような行がある。

Be calm in arguing: for fiercanesse makes

Error a fault, and truth discourtesie.

Why should I feel another mans mistakes

More then his sicknesses or povertie?

In love I should: but anger is not love,

Nor wisdom neither: therefore gently move.

論争するときには冷静になりなさい。激してしまえば

思い違いも過失に、真実も無礼になってしまうから。

何故他人の誤りに気をとめるのか。

その人の病気や貧しさ以上に。

愛を持って接すべきなのです。でも怒りは愛でも

智恵でもありません：だから優しく振舞いなさい。

優しいハーバートの心がよく表われていると思われる。しかし、この作詩より以前と考えられる1620年に一度論争をしている。まだ聖職に着く前でケンブリッジ大学の public orator であつた時、スコットランドの長老派の学者アンドルー・メルヴィルが英国々教会およびケンブリッジ大学に対する厳しい攻撃をし、ハーバートがラテン語で反論を書いた時である。これがジェーム

6. キリストの贖罪行為の本質は、人間の罪によって破られた神の栄光を、人間に代って回充足したとする説。

7. 充足説の欠点であるキリストの自己犠牲的愛を強調する説。

8. キリストの贖罪の本質は人間の罪に対する神の刑罰を代って受けたことにあるとする説。

ズ一世の目を引くことになった。ハーバートが26才の時である。

III

ハーバートの『教会』の中の詩は160篇あり、代表作は大部分この中に含まれている。160篇のうち同じ題が付けられているものがあり次の通りである。

‘H. Baptisme’ I, II (「洗礼」), ‘Sinne’ I, II (「罪」),
 ‘Affliction’ I～V, (「苦悩」), ‘Prayer’ I, II (「祈り」)
 ‘Antiphone’ I, II (「応答」), ‘The Temper’ I, II (「焼入れ」)
 ‘Jordan’ I, II (「ヨルダン」), ‘Employment’ I, II (「目的」)
 ‘The H. Scripture’ I, II (「聖書」), ‘Praise’ I, II (「讚美」)
 ‘Vantitie’ I, II (「虚偽」), ‘Justice’ I, II (「正義」)
 ‘Love’ I～III (「愛」)

題名だけからみると「苦悩」が一番多く、「讚美」「愛」と続く。制作年代は研究されてはいるが、決定的なものはない。しかし、詩の配列はハーバート自身が行っていたものを印刷した形になっている。少なくとも、『教会』に納められた第一番目に‘The Altar’ (「祭壇」) が置かれているのはハーバートの意図があったであろう。『教会の玄関』があり、『教会』に入ると、そこに「祭壇」の形になった形体詩 (Shaped Verse) がある。「祭壇」は教会の聖餐式を執行するもの、その形の中に詩が書かれている。

The Altar.

A broken ALTAR, Lord, thy servant reares,
 Made of a heart, and cemented with teares:
 Whose parts are as thy hand did frame;
 No workmans tool hath touch'd the same.

A HEART alone
 Is such a stone,
 As nothing but
 Thy pow'r doth cut.
 Wherefore each part
 Of my hard heart
 Meets in this frame,
 To praise thy Name :
 That, if I chance to hold my peace,
 These stones to praise thee may not cease.
 O let thy blessed SACRIFICE be mine,
 And sanctifie this ALTAR to be thine.

この15行目「汝の祝福されし犠牲」というのがキリストの受難のことであり、「和解の業」である。その犠牲を私のものとして下さい、と詩人は祈り、「この祭壇を聖別して下さい。」と続けている。次は‘The Sacrifice’（犠牲）という題で、イエス自身が語る形式をとった詩が続く。

ああ、お前たちは皆、通りすぎる。目も心もこの世のことにばかり
目を輝かせるが、私には目もとめない。

この詩はイエスが自分の一生を独白する形の詩で4行で一連を成し、最後の行「わたしが受けた悲しみが、かってあったか」が、61回繰り返えられる。最後のリフレインが二箇所異っていて「私が受けた悲しみは決して無かった。」となっている。

しかし、ああ我が神、我が神、何故見捨てたのですか。
子であることをお喜び下さったのに。
我が神、我が神、 —
私が受けた悲しみはいままで決して無かった。

と、第54連で入り、最後の第63連の締め括りにも、このリフレインが使われる。

But now I die ; now all is finished.
My wo, mans weal : and now I bow my head.
Onely let others say, when I am dead.
Never was grief like mine.

そして、‘The Thanksgiving’（「感謝」）の題へと移る。一つ一つの詩は内容はもちろんのこと形式的工夫が様々に施されている。この「感謝」というという詩は前の「犠牲」の詩のイエスの独白に答えるような形で作られている。「犠牲」の最後の‘grief’を受けて「ああ、悲しみを受けられし玉様よ」（Oh King of grief!）とイエスに呼びかけている。次の‘The Reprisall’（「報復」）では‘passion’（受難）という単語が関連したイメージとして繋っている。そして‘The Agonie’（「苦しみ」）となる。この題はすなわちイエス・キリストの苦しみのことである。

Philosophers have measur'd mountains,
Fathom'd the depths of seas, of states, and kings,
Walk'd with a staffe to heav'n, and traced fountains :
But there are two vast, spacious things,
The which to measure it doth more behove :
Yet few there are that sound them ; Sinne and Love.

哲学者（これは今で言う科学者）達は山の高さ、海の深さ、国の広さや国王のことなどを調べ、さらに定規を使って天体までも研究し、川の源流を極めたりしている。しかし、二つの大きくて、貴重な事柄である「罪」と「愛」を当然知って置かねばならないのに、それらを極めつくそうとする者は少ない、と詩人は嘆くのである。

Who would know Sinne, let him repair
 Unto Mount Olivet ; there shall he see
 A man so wrung with pains, that all his hair,
 His skinne, his garments bloudie be.
 Sinne is that presse and vice, which forceth pain
 To hunt his cruell food through ev'ry vein.

もし「罪」を知りたいならオリブ山に行ってごらんと勧める。そこで苦しみに打ちひしがれて、髪の毛も皮膚も衣も血にそまっている^{かた}方を見るだろうから。「罪」とはあのブドウしぼり器なのです。罪が(vice は vise でもある)万力となって苦しめ、体のいたるところに入り込んでくる。このイメージは旧約聖書イザヤ書第 63 章からのものであり、イエス・キリストのイメージと重ねあわされる typology (予表論) と呼ばれるものである。イザヤ書には次のように記されてある。「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。もろもろの民のなかに、わたしと事を共にする者はなかった。わたしは怒りによって彼らを踏み、憤りによって彼らを踏みにじったので、彼らの血がわが衣にふりかかり、わが装いをことごとく汚した。」

Who knows not Love, let him assay
 And taste that juice, which on the crosse a pike
 Did set again abroach ; then let him say
 If ever he did taste the like.
 Love is that liquour sweet and most divine,
 Which my God feels as bloud ; but I, as wine.

「愛」を知らない人に知らせ、あのキリストが十字架上で流した血を味あわせて欲しい。そして「いままで同じものを味っていたならば」と告白するようにして下さい、と祈るのです。愛はその飲みもの、甘く最も聖なるもの。それを神は血だというのですが、私には香りの良いブドウ酒なのです。

この‘The Agonie’（「苦しみ」）の詩の構造は三つに分けられている。最初の連では、当時の流行となっていた科学的な調査、地球のこと、天体のこと、聖書の記述と科学的なことが矛盾する

ようなことがどんどん研究されていたことが述べられている。しかし、忘れていることがあると問題提起をするのです。第二連に移るとイエスが十字架にかけられる前の祈りの場面が、旧約聖書のイメージを使ってここでは「罪」の問題が描きだされる。そして第3連では「愛」の問題がキリストの血とともに描かれる。こゝで探究しなければならない二つの事柄が、飲むことによって解決へと導かれる。こゝにハーバートの1つの型、すなわち the pattern of reconciliation (和解の型) があると思われる。5篇の詩の中の連続したイメージの使い方を見たが、この後、'The Sinner' (「罪人」), 'Good Friday' (「受苦日」), 'Redemption' (「贖い」), 'Sepulchre' (「聖遺物匣」), 'Easter' (「イースター」) 'Easter-wings' (「イースターの翼」) と続く。この第11番目の詩は第1番目の詩のような形体詩 (Shaped Verse) である。

Easter-wings.

Lord, who createdst man in wealth and store,
 Though foolishly he lost the same,
 Decaying more and more,
 Till he became
 Most poore:
 With thee
 O let me rise
 As larks, harmoniously,
 And sing this day thy victories:
 Then shall the fall further the flight in me.

My tender age in sorrow did beginne:
 And still with sicknesses and shame
 Thou didst so punish sinne
 Most thinne.
 With thee
 Let me combine
 And feel this day thy victorie:
 For, if I imp my wing on thine,
 Affliction shall advance the flight in me.

この詩は翼を広げた形をしていて英文ではこの形を縦にして見ることになる。そして次に 'H. Baptisme' (I), (II) (「洗礼—その一, その二」) がある。「洗礼—その二」も3つの構造を持っている。「主よ、あなたのところに行く全ての道は狭く小さな門ですから、あなたは幼い時に私を

とらえて、信仰を持たして下さったのですね」と詩人は言い、これからも神のことを詩に書き、私も神様の子供と記させて下さい、と祈ります。神の意志に逆わず従順でいさせて下さい。こっそりと私の身体を私の魂に着せるとしても、私の魂に何も言わせないで、ただ魂の汚れなさを保たせて欲しいのです。身体の成長など水ぶくれにすぎませんから。幼子の時の魂は健全なのです。‘Faith’（「信仰」）という詩に

If blisse had lien in art or strength,
None but the wise or strong had gained it :
Where now by Faith all arms are of a length ;
One size doth all conditions fit.

ハーバート自身が説教に使ったかもしれないと思わせるような詩である。残念ながらハーバートの説教は残っていない。幸福というのが学問や権力の中にあるとしたら、頭が良くて力のある人しか手に入れられなくなってしまう。そこで今、信仰によって皆同じになっていて、一人一人が可能性を持っていることを知らせよう。百姓が高僧ほどに信仰深いかもしれないし、背丈も大きいかもしれない。こんな風に誇るべき知識をへこますことになるし、また恵みは、斑のある性質を満してもくれる。そして最後の連で

What though my bodie runne to dust?
Faith cleaves unto it, counting evr’y grain
With an exact and most particular trust,
Reserving all for flesh again.

たとえ私の肉体が塵になったとしたって、信仰は肉体にしっかりとしがみつき、正確で最も几帳面な注意を払って塵の1つ1つを数え、再び肉体が必要な復活の日のために、とっておくのです。‘Prayer’ I（「祈り—その一」）を見ていきたい。

Prayer the Churches banquet, Angels age,
Gods breath in man returning to his birth,
The soul in paraphrase, heart in pilgrimage,
The Christian plummet sounding heav’n and earth ;
Engine against th’ Almighty, sinners towre,
Reversed thunder, Christ-piercing spear,
The six-daies world transpcing in an houre,
A kinde of tune, which all things heare and fear ;

Softnesse, and peace, and joy, and love, and blisse,
 Exalted Manna, gladnesse of the best,
 Heaven in ordinarie, man well drest,
 The milkie way, the bird of Paradise,
 Church-bels beyond the starres heand, the souls bloud,
 The land of spices ; something understood.

こゝでは祈りの様々の定義がなされている。「祈り」は教会の食べもの、天使の年令、神の息、魂の説明、心の巡礼、天地を探るキリスト者の定規、神への破城鎚、罪人の塔、下から昇る雷、キリストを貫く槍、六日間の天地創造、全てのものが聞き畏れる調べ、柔和、平安、喜び、愛、至福、高められたマナ、最高の嬉しさ、平服の天、正装の人、天の川、楽園の鳥、教会の鐘、魂の血、香りの国、悟ったもの。3行目までは、伝統的なイメージ。次の3行はキリスト者にも philosopher（現代の科学者を含む）のように天と地を探るための道具も必要だと言っており、次の破城鎚のイメージも plummet と同じようにキリスト教に相入れない響きがある。罪人の塔、雷、キリストの脇腹をさした槍もどちらかと言えば反対のイメージがあるが、ハーバートはあえてこの言葉を使うことで、祈りの力強さを持たせようとしたのであろう。次の2行は一時間で天地創造に費した六日間にも匹敵するような祈り、それが聞くものを畏れさせるような一つの調べとなる。すると突然静けさが出現し、また伝統的なキリスト教のイメージへと帰って来る。神様に食べてもらうマナ、最高の喜び、祈りは神から見れば親しさ、人間から見ると少しかしこまっているというところでしょうか。次の2行は前にすさまじい音を聞いた後、静かになったところで、色が見えてくる。空に輝く星と極楽鳥の色、それに、静かな鐘の音とキリストの血のイメージが入り、最後の1行はキリストの香りの国、約束されたものへと導かれる、という解決へと向う。こゝにも「和解の型」がある。次に取り上げるのは第23番の‘The Temper’（「焼入れ」）で「祈り」よりは明確なイメージと型がある。

How should I praise thee, Lord! how should my rymes
 Gladly engrave thy love in steel,
 If what my soul doth feel sometimes,
 My soul might ever feel!

これは第1連であるが、「どうしたら主よ、あなたを讃えることができますか」と神に問うところからこの詩は始まります。詩人は神の愛を鋼鉄の板に刻みたいと思っている訳であります。時折感じることを魂がいつでも感じることもできるとしても、どのようにしたらよいのか、と悩む。40以上も天があったとしても（当時、天は7つあると信じられていた）時々全ての天をのぞきま。時々二重の天にも行けません。時々地獄へ落ちてしまうこともある。

O rack me not to soch a vast extent ;
Those distances belong to thee :
The world's too little for thy tent,
A grave too big for me.

詩人は次の第4連で問います。神よ、あなたは天国から地獄まで塵から出た者を引きのぼすほどなのに、人間と戦うつもりなのですか。偉大な神が人間の身体の長さを測るのですか。人間はあなたの背丈に達するとでもいうのでしょうか。

O let me, when thy roof my soul hath hid,
O let me roost and restle there :
Then of a sinner thou art rid,
And I of hope and fear.

第6連は「しかし、お好きなようになさって下さい。というのは確かに神の示す道は最良なのですから」で始まります。「私をのぼそうと縮めようとなんなりとして下さい。私はあなたの負債者ですから。こういうことは音楽をより美しく奏でるために私の胸を調弦しているにすぎません。」そして第7連は最後の連である。

Whether I flie with angels, fall with dust,
Thy hands made both, and I am there :
Thy power and love, my love and frust
Make one place ev'ry where.

私が天使と共に天国へ舞上るか、塵と共に地獄に落ちるかはあなたの手がなしたもうことなのです。私はあなたの手のうちにある。あなたの力と愛、私の愛と信頼があれば、あらゆる場所を1カ所にするのです。

ハーバートは形体詩 (Shaped Verse) の形を使ったり、四行連 (Four-line Stanza) や五行連 (Five-line Stanza) を使ったり様々の工夫をしている。'The Water-course' (「水路」) では、二つの言葉を読者に選らばせる詩を書いている。

But rather turn the pipe and waters course
To serve thy sinnes, and furnish thee with store
Of sov'raigne tears, springing from true remorse :
That so in purenesse thou mayst him adore,

Who gives to man, as he sees fit, {
 Salvation.
 Damnation.

この五行連は四行連より変化に富み、複雑で音楽的效果を増すことが出来ると言われる。abcbb, ababb, abaab, abbaa, aabba, ababa, abccb などがあるが、この詩は ababc の形である。c の部分は「その方は人間はいずれが合っているのかを考えて「救い」か「破滅」かを決めるのである」と終る。

‘Praise’(I) (「讚美一その一」)はハーバートが病気の時の詩であろう。元気になってもっともっと神を讚美したいと書いている。ハーバートは身体が弱かったし、36才まで結婚しないでいたのもそれが一つの理由であった。「私が1篇か2篇の詩を書くことが、讚美のすべてです。そして元気になるのです。」もし身体をなおして下さるなら、神様、あなたは私の讚美の詩を手に入れることになるのです。私は自分の足で歩いて教会に行きます。翼を付けて下さったら、飛んでみます。空に昇れたら、天国までも行きます。人間は皆弱いもので、最初から力ある王様などいないのです。人間の腕は短かいけれど石弓があればもっと活躍するでしょう。飲んだ薬の効果が頭まで達して立派な魂(頭は魂の住むところと考えられていた)と同じ階の隣の部屋に宿るかもしれません。貧しい人々を高めて下さい。そうすればもっと沢山のことをすることができます。そして最後の第5連での「讚美」をしめくくる。

O raise me then! Poore bees, that work all day,
 Sting my delay,
 Who have a work, as well as they,
 And much, much more.

こう言うわけですから私を元気にして下さい。一日中蜂に刺されるように痛く、仕事が手につきません。蜂が働くように私にも仕事があります。たくさん、それ以上にです。

ハーバートはまた建築用語や音楽用語を使う。‘Church-musick’(「教会音楽」)の中で音楽に感謝する詩人の姿が描かれます。不快な気持になったとき、心を落ちつかせ楽しい気持に変えてくれる。音楽を聞いていると気持が軽くなり、生きること愛することも楽しくなる。しかし、時々言うのは「神よ、かわいそうな国王を助けて下さい。」という言葉。音楽が無いと死んでしまいます。私と調子が合わないと、きっとそうになってしまうでしょう。しかし、私が音楽と旅をすれば、あなた(音楽)は天国への道を知るので。‘Church-lock and key’(「教会の錠と鍵」)も「教会音楽」と同じく三連の詩で第1に問題提起がされ、それが発展し、解決の型をとっている。

I know it is my sinne, which locks thine eares,
 And bindes thy hands,

Out crying my requests, drawing my tears ;
Or else the chilnesse of my faint demands.

But as cold hands are angrie with the fire,
 And mend it still ;
So I do lay the want of my desire,
Not on my sinnes, or coldnesse, but thy will.

Yet heare, O God, onely for his blouds sake
 Which pleads for me :
For though sinnes plead too, yet like stones they make
His blouds sweet current much more loud to be.

第3連のイメージは川の流れが上手に使われている。深い川は音をたてないが、浅瀬の方は大きな音をたてる。そのように罪はうるさいほど弁護して叫ぶかもしれないが、神よ、どうぞキリストの贖いになつたときだけお聞き下さい、と祈る。教会の中にあるものがことごとく詩の題になっている。‘Church-floore’（「教会の床」）、‘The Windows’（「窓」）など。「教会の床」では建築家が神のイメージとして使われている。

But while he thinks to spoil the room, he sweeps.
Blest be the *Architect*, whose art
Could build so strong in a weak heart.

‘Content’（「満足」）と名付けられた詩はユーモアでもある。ハーバート自身が自分に言いきかせている。

Peace mutt’ring thoughts, and do not grudge to keep
Within the walls of your own breast :
Who cannot on his own bed sweetly sleep,
Can on anothers hardly rest.

ブツブツ言うのを止めにしなさい。自分の腕の内に秘めておきなさい。自分のベッドで眠れない者は他のだつて駄目に決っている。第3連は火打ち石のイメージである。

Mark how the fire in flints doth quiet lie,

Content and warm t' it self alone ;
But when it would appeare to others eye,
Without a knock it never shone.

第4連では心の持ち方次第で変わるのだ、と歌います。私に与えよ、しなやかな心を、その優しい心根はあらゆる地位に合うのだろう。王冠を目指すことすら可能だとしたら、喜びがあれば修道院の中にも住むことも出来る。そして満足に関する展開があり、第9連を迎える。「だから、一人ごとをやめなさい。あなたの話が自分や友だちをなやませなくなるまでは。」

Then cease discoursing soul, till thine own ground,
Do not thy self or friends importune.
He that by seeking hath himself once found,
Hath ever found a happie fortune.

求めて自分自身を発見した者は幸運を前から見付けているのだから。次に定義の詩 (Definition Poetry) と呼ばれる詩を見てみよう。'Constancie' (「節操」) は志操堅固とか不変とか一定とか訳される。ハーバートの頭の中にはある人物像があったかもしれない。自分の信仰を貫いて決して曲げることのなかった人。「誰が正直者なのか？」と詩人は問います。常に力強く正しく求める者。神に対して、隣人、自分自身に対しては最も直実に求める人。暴力やおもねりに屈しない人である。乗馬や会計士のイメージを使い、その人の言葉、仕事そしてやり方も首尾一貫して、全て明解で真直ぐである。

Who never melfs or thaws
At close tentations : when the day is done,
His goodnesse sets out, but in dark can runne :
The sunne to others writeth laws,
And is their vertue ; Vertue is his Sunne.

その人は密かな誘惑にも決して負けない。寿命が終ったとしても、善良さは沈まず、暗闇の中を生きつづける。他の人に向けて太陽は法則を書く。太陽は美德となり、美德が太陽(キリスト)である。最後の第7連は、「その人に何もやってあげられず、大勢の人々はその人の意志と違うところにボールを投げ、その人の手足をビクつかせ、それを直せずに真似をする。安定して確実に射る弓術者がいる。いつも正確でしずかにそうであれと祈る人である。

'Vantitie' (「虚偽」) は「海賊の天文学者は天球に穴をあけ、すばやく刺し貫ぬく心(糸)のついた針を通すことができます。彼は天球の様子を眺めたり、家々を歩き廻り、測量して歩くのです。

あたかもそこで土地売買するために彼が計画を立たかのように。彼は天球が踊っているのを見たり、天球のよく見える星の様子と目に見えにくい星の運動の両方をほどなく知るので。第1連は‘the fleet Astronomer’、第2連は‘the nimble Diver’（「敏捷な潜水夫」）、第3連は‘the subtil Chymick’（「不思議な錬金術師」）などのイメージを駆使して様々のことを発見して来たことを述べ、最後の第4連では

What hath not man sought out and found,
 But his deare God? who yet his glorious law
 Embosomes in us, mellowing the ground
 With showres and frosts, with love & aw,
 So that we need not say, Where's this command?
 Poore man, thou searchest round
 To finde out *death*, but missest *life* at hand.

いままで人間は何を探し出せず、発見して来なかったのか？ただ神だけではなかったのか。神は栄光に満ちた自然の法則で私たちを守り、雨や霜で、愛と畏れを持って地面を美してくれている。だから「自然の法則はどこから来るのか」などと問う必要はないのです。おろかな人よ、そんなことをして探し回っているうちに手近にある人生を失って死を見つけることになるのですよ、と詩人は警告する。ハーバートの詩の意外性は温みのあるものが多い。‘Man’（「人間」）と題する詩がある。出だしは家を建てる話で始まる。これは新約聖書のルカ伝 14 品 28 節「だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げるのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、すわってその費用を計算しないだろうか」からハーバートが考えついたのではないかという箇所である。神よ、私は今日聞きました。堂々とした邸宅を建てる者はいず、ただそこに住みたいと思っている人がいるだけだということ。人間以上に堂々とした家がいままであったでしょうか、あるいはこれからもあると言うのでしょうか。なぜなら人間が全てだから、それ以上でもあります。人間は木ですが、木よりもっと果実をつけます。獣ですが、それ以上のもの。私たち人間だけが持っている理性と言葉。オウムが啞でなく、実状を説明できたら感謝するかもしれません。人間の長所が述べられた後、第9連で「それだから、我が神よ、とても立派に建った宮殿をお持ちなのです。そこにどうぞお住み下さい。」と第1連の家のイメージにもどって行くのです。

Since then, my God, thou hast
 So brave a Palace built ; O dwell in it,
 That it may dwell with thee at last!
 Till then, afford us so much wit ;
 That, as the world serves us, we may serve thee,

And both thy servants be.

宮殿はとうとうあなたを迎えることになるのです。その時まで、たくさんの知恵を与えて下されば、この世のものが私たち人間に仕えるごとく私たちがあなたに仕えましょう。そしてこの世と私たちがあなたの僕となるでしょう、と。第1連のイメージが最後の連のイメージと結びつく例である。次に身体が弱かったハーバートが人生を花束に托して歌った詩‘Life’（「人生」）を見てみよう。

I made a posie, while the day ran by
Here will I smell my remnant out, and tie
 My life within this band.
But Time did beckon to the flowers, and they
By noon most cunningly did steal away,
 And wither'd in my hand.

My hand was next to them, and then my heart :
I took, without more thinking, good part
 Times gentle admonition :
Who did so sweetly death's sad taste convey,
Making my mind to smell my fatal day ;
 Yet sugring the suspicion.
Farewell deare flowers, sweetly your time ye spent,
Fit, while ye livid, for smell or ornament,
 And after death for cures.
I follow straight without complaints or grief,
Since if my part be good, I care not if
 If be as short as yours.

愛しい花々よ、さようなら。立派にあたたちの時をすごしました。生きている間にふさわしく香りを出して。死んでからも良薬にふさわしく。私も不平や悲しみをもらさずにすぐ後に従います。なぜなら私の香りが良ければ、あなたがたのように短い人生でも気にしません。ハーバートの優しさの良く出た詩である。

‘The Collar’（「軛」）はハーバートの詩のうちで最も個人的な詩であり、反抗の詩である。これ以上、神に引き回されるのはごめんだという拒絶の態度で始まる。「私」が反抗することが、この詩の主題である。荒々しい言葉でこの詩は始まる。いままで我慢に我慢を重ねて神に従って来たけれども「もうあなたの言うことを聞きません」と呼ぶ。何と言われても「私は家を出て外に行

きます。」さらに何でこんなことで嘆いたり、愚痴をこぼしたりしなければならないのかを問う。それから、その理由が述べられている。神を信ずることにより、詩作することとか、私の人生そのものは自由なのに何で嘆願して苦しまねばならないのでしょうか、と「私」は問うのである。それも神を信じてもただ苦しいばかりで何の利益にもならず、楽しいことなど何ありません。なるほど嘆きをいやすのに聖餐があったことは確かです、と言って「私」は神に対して消極的感謝をします。そして13行から16行は詩作を捨て、想いのままの人生を送ることなく神に従って生きてきた一年は無駄で無意味であったのだろうかと呼ぶのである。17行から26行はその間を自分の魂に向ってする様子が描かれている。「私の心よ、喜ばしき花々も花輪もないが、そこには果実と詩作する両の手がある」となぐさめるのである。お前の全ての嘆きに吹き飛ばされた年を取りかえして、何が適当でないかなどと冷たい議論をやめなさい。お前（「私の心」）が考えているキリスト教の檻、生命綱を捨てなさい。「私」は「私の心」に向って命令する。「出て行きなさい。注意しなさい」そしてI will abroadのリフレインが印象的に来る。そこでお前の死の首根っこを呼び入れ、お前の恐れをしばってしまえ。その必要を願わない者は当然荷を負うこととなる。そして33行から次の様に続く。

But as I rav'd and grew more fierce and wilde
 At every word,
 Me thoughts I heard one calling, *Child!*
 And I reply'd, *My Lord.*

しかし私がわめき、ますます激しく荒くなった時、一事言うたびに、一つの呼び声を聞いたように思った。「子よ！」そして私は答える。「我が主よ。」論理的には13行～16行の心の傲満な叫び、17行～26行は善良な意志がなだめようとする。27行～32行はしかしいきりたった心に対し、譲歩せざるを得ない。27行のbutはいまままでの記述をひっくりかえす期待を裏切って優しい神の声としてあらわれる。これは迫害に迫害を加えて来たパウロがダマスコ途上でキリスト自身に出会い回心した記事のように突然起る。この和解の型と呼び得る構造はハーバートの詩の中に数多く見い出される。このような構造を何故ハーバートが好んで用いたのか、に答えるのに『田舎司祭の務め』の中の言葉が参考になるであろう。

『田舎司祭の務め』第7章に司祭の説教の項があり、次の様に述べている。

The Parson Method in handling of a text consists of two parts ; first, a plain and evident declaration of the meaning of the text ; and secondly, some choyce Observations drawn out of the whole text, as it lyes entire, and unbroken in the Scripture it self.

説教の用いる聖句を扱う場合の司祭の方法は2つある。第1は聖句の意味を簡潔で明確なものとする事、第2は聖書にある通り全体の聖書に裏付けられ、聖書自体の中で統一のとれた、選びぬかれた観察があること。

もう1つはカテキズムの問題である。カテキズム(Catechism)はキリスト教信仰を洗礼または堅信礼志願者、あるいは子供たちに教えるために作られたものである。ヴェルツブルクの司教ブルノー(1045年没)によるものが最初といわれている。ルターの教理問答(1529年)、ジュネーヴ教理問答(1542年)、そしてウエストミンスター教理問答(1647年)が出ている。最後に記したものは、後に英国各教会、長老派教会、会衆派教会、バプテスト教会でも用いられた。ローマ・カトリック教会においてはプロテスタント諸教会における教理問答の実践を見て、その重要性を感じ、イエズス会士P・カニシウスが「カトリック要理」を公にした(1556年)。

ハーバートは『田舎司祭の務め』の第21章で司祭がカテキズム(教理問答)を重んずべきだということを説いている。

The Countrey Parson values Catechizing highly : for there being three points of his duty, the one, to infuse a competent knowledge of salvation in every one of his Flock; the other, to multiply, and build up this knowledge to a spirituall Temple; the third, to inflame this knowledge, to presse, and drive it to practice, turning it to reformation of life, by pithy and lively exhortations; Catechizing is the first point, and but by Catechizing, the other cannot be attained.

「田舎司祭は「教理問答」を重要なものと考えなさい。司祭の務め三つのことが含まれている。すなわち第1に教会員一人ひとりに救いについての十分な知識を与えること、第2にその知識を増し加えて霊なる神殿を建てること。第3にこの知識を燃えさせたせ、力づけ、実際の働きとし、きびきびと生き生きとした説教により人生の改革へと向わせること、のためである。」ハーバートはもちろんウエストミンスター教理問答を見ることはなかったが、ルターの教理問答やカルヴァンの「キリスト教綱要」、「カトリック要理」などは頭の中にあっただであろう。ハーバートは続けて説教には尊厳みたいなものがあるが、教理問答にはキリスト者の再生によく合った謙虚な気持が表われていると言う。司祭は「教理問答の教義」を全て重んじるべきである。若い人々に対する言葉使いや、老人に対する思い遣りなど。しかし機械的にやっている教理問答は心に響かないから工夫すべきであることも述べている。

ハーバートの詩の題名はこの「教理問答」で使われているものと一致するものもある。教会論とか礼拝論の原理的なものだけでなくキリスト教的な教えが具体的に示されている点でもハーバートの詩と同じ意図を知ることが出来る。逆に言うと「教理問答」に出てくるような題を使って詩を作っているのである。「教理問答」に表われる題は「聖書」「神」「三位一体」「創造」「摂理」「人間の墮落と罪」「仲保者キリスト」「自由意志」「義認」「子であること」「聖化」「悔改め」な

どがあげられる。教理問答にも含まれているが、「降誕日」(‘Christmas Day’), 「大斎節」(‘Lent’ (‘四旬節’)), 「受苦日」(‘Good Friday’) 「復活日」(‘Easter Day’), 「聖霊降臨日」(‘Whitsunday’) 「三位一体主日」(‘Trinity Sunday’) などは教会暦の中でも重要な日である。教会暦として使われているものは、ハーバートの詩の題名にも使われている。そのような題材を使いながら、キリストの和解の業を司祭が代って行うように、詩人は和解の形を詩の中に表わそうとしているのではないか。もちろん解決を示めさない詩も時にはあるが、少なくとも解決をめざすというか神との和解を求めているか、和解の型になっている場合が多いのが特色である。そしてその和解の型の中に逆説的な言葉‘but’, ‘yet’, ‘nay’で終る形が多いのも特色である。『教会』に納められた160篇のうち、実に51篇に‘but’の形が使われている。主なものをあげると次のようである。

But sinne hath fool'd him. Now he is
 A lump of flesh, without a foot or wing
 To raise him to a glimpse of blisse :
 A sick toss'd vessel, dashing on each thing ;
 Nay, his own self :
 My God, I mean my self.
 ‘Miserie’

But while I bustled, I might heare a friend
 Whisper, *How wide is all this long pretence!*
There is in love a sweetnesse readie penn'd :
Copie out onely that, and save expense.
 ‘Jordan(II)’

But, dearest Mother, what those misse,
 The mean, thy praise and glorie is,
 And long may be.
 Blessed be God, whose love it was.
 To double-moat thee with his grace,
 And none but thee.
 ‘The British Church’

But can he want the grape, who hath the wine?
 I have their fruit and more.
 Blessed be God, who prosper'd *Noahs* vine,

And made it bring forth grapes good store.
But much more him I must adore,
Who of the Laws sower juice sweet wine did make,
Ev'n God himself being pressed for my sake.
 'The Bunch of Grapes'

Yet if thou shunest, I am thine :
I must be so. if I am mine.
There is no artiching with thee :
I am but finite, yet thine infinitely.
 'Artillerie'

Yet let him keep the rest,
But keep them with repining restlessness :
Let him be rich and wearie, that at least,
If goodness leade him not, yet weariness
May tesse him to my breast.
 'The Pulley'

Truth Lord, but I have marr'd them : let my shame
Go where it doth deserve.
And know you not, says Love, who bore the blame?
My deare, then I will serve.
You must sit down, says Love, and taste my meat :
So I did sit and eat.
 'Love(III)'

最後の「愛—その三」は文頭に'but'が来ていないが、内容的には逆説的な段階に入るところであり、ヴァリエーションと見ても良いであろう。この「愛—その三」は『教会』の中の最後の詩である。「真実なる主よ、しかしながら私の目を汚してしまいました。その罪に相応しい所に行かせて下さい。愛なる主は言われる、お前は知らないのか、その咎は誰が負ったのか。分かりました。それでは私が給仕します。主は言われる。座って、この晚餐に与かりなさい。そこで私は座って、食べた。」

ハーバートの詩にあらわれた'but'は pivot word の働きをしていて、その後続く相反する状況が引き出されることが多い。この使い方はダンの恋愛詩にも宗教詩にも見られることである。こ

の逆説はキリスト教の伝統的逆説とも深く結ぶついていると思われる。特にハーバートの場合は詩作することと司祭として生きることが一致していたような場合、逆説の使い方はキリスト教の「教理問答」の答えの型になったであろう。しかし、ハーバート自身が『田舎司祭の務め』でマンネリ化の危険を説いているように詩作においても様々の工夫が凝らされてはいる。

IV

ジョージ・ハーバートの詩と『田舎司祭の務め』との関係を見てきたが、イメージの使い方や内容はキリスト教「教理問答」と一致することが多い。ハーバート自身は詩という形を様々に工夫をすることによって、詩が「教理問答」になっており、詩全体がハーバートの考える「キリスト教教理問答集」となっているのである。逆説についての研究についてはもう少し広げて「逆説の系譜」を辿る必要が残されるであろう。